

2.

鉄のモニュメント 自然が作り上げた弥生時代の鉄の顔「鳴石」

- 唐古鍵弥生遺跡から出土した最大級のヒスイがおさまられた湯鉄鉢容器 -

2005.2. 神戸「2004 発掘された日本列島」展 より

2005.3.1. naruishi.htm by Mutsu Nakanishi



唐古鍵遺跡 唐古池の端に復元された楼閣 2000.2月



2004 年発掘展が神戸にやっとやってきて 見に行ってきました。

毎年 6月東京博物館がスタートで 日本全国回るので、2004 年度は神戸が最後。

その展示の中に大和田原本町にある唐古鍵弥生遺跡から出た「湯鉄鉢の容器に入ったヒスイの勾玉」がありました。層状の湯鉄鉢の層がよく見える。これは「高師小僧」ではないか・・・

説明書きによると「砂礫層のなかにある粘土を核として鉄分が巻きつき、殻を形成し、核部分の粘土が乾燥して空洞となって、生成したようである。空洞部分に乾いて小さくなった粘土やしみこんだ水が音を立てることから 鳴石・水石とよぶ」と。

弥生の宝物容器として「鳴石・高師小僧」小僧に出会えるとは・・・

鉄の最も古い顔のひとつ 自然が作り上げた鉄の顔に見入っていました。

大和平野の真ん中、日本の国の始まりを示すのではないかとされる弥生時代の中心的環濠集落で、楼閣を持ち、そこではさまざまな工房が営まれていたという。

卑弥呼の国といわれる巻向遺跡群はここから、5km ほど東へいった青垣の山すそ すぐそこである。

この唐古・鍵遺跡で楼閣が描いた土器片が出たときには、ここが邪馬台国ではないかと大騒ぎになった重要な弥生遺跡である。私が訪ねたのは5年前の今ごろ2月。弥生の楼閣を見たくて出かけました。

そんな大和の中心的な弥生遺跡の発掘が今も続いているが、環濠集落の西地区を区画する溝から自然にできた空洞のある湯鉄鉢の塊を容器に宝物である大きなヒスイの勾玉2個が入れられて出土したという。



おそらく 何か祭祀儀礼と関係するのでしょうか、中に入れられた勾玉ばかりでなく、容器として用いられた
湯鉄鉢の塊も重要な役割を持っていたに違いない。



湯鉄鉢容器とヒスイ勾玉

塊の形状とその成因アプローチに多少差はあるが まさしく弥生の「高師小僧」である。
沼や葦原などに堆積した鉄分が植物の根などに吸い寄せられ、その周囲で長い年月をかけて 年輪を刻みながら
大きく塊状に成長する。そして、その根などが枯れたり、入り込んでいた泥などがなくなると、真ん中が空洞
の湯鉄鉢の棒状などの塊ができる。周囲の泥が洗い流されるとちょうど「小僧」が立ち並んでいるように見え
る様から「高師小僧」とよばれる。

高師小僧 豊橋市田高師台 高師台中学周辺で 2003. 11. 12.

豊橋の東 渥美半島の根っこ 葦が一面に広がる高師ヶ原
今 この台地では、雨上がり表面の土が洗われると
煮鉄の小僧が顔をのぞかせる
葦の根に吸い寄せられた鉄分が長い時間をかけて
根の周りに付着析出して棒状に成長する。
それが今顔をのぞかせ、「高師小僧」と呼ばれる

高師ヶ原台地
天伯ヶ原台地

また、内部にできた空洞に石などが入ると「コロ コロ」と音がする。

「鈴」や「神社のおすず神事」の始まりともいわれ、また、古代の製鉄原料の可能性として伊吹・東海・諏訪・
伯耆・出雲などに伝承がある。前に「高師小僧」を調べて、知った湯鉄鉢の不思議。

日本各地に種々伝承があるこれらの系統にのるものではないのか。。。。

和鉄を追ってきて、日本古来の伝承に触れるたびに考えてきた「たたら和鉄精錬前夜 この湯鉄鉢（鬼板・高師
小僧・沼鉄など名前はいろいろ）を使った和鉄精錬があつたのではないか。。。。」。

あたっているかどうかはまったく判りませんが、弥生の時代にすでに湯鉄鉢の塊が、重要品として扱われていた
ことにびっくりするとともに連綿と続く伝承の重さをつくづく感じています。

鉄の最も古い顔のひとつ 自然が作り上げた鉄の顔に見入っていました。

大事な宝物の容器として 1800 年も前 弥生時代に自然にできた空洞の濁鉄鉱の塊がすでに意図的に使われていました。伝承とは別に古代の重要な材料として半信半疑でしたが、俄然信憑性を信じたくくなって、その前に釘付けで見ました。

鉄の最も古い顔のひとつです。

ついでながら ヒスイは漢字で「翡翠」この翡・翠 オス・メスのカワセミの漢字。

このオス・メスのカワセミの美しい体の色が交じり合うとヒスイの美しい色模様になるところからきているという。。。



ヒスイは黒曜石とともに縄文時代からのもっとも古い交易品。信州糸魚川の谷が日本最大の原産地で 日本全国に原始・古代の宝・装飾品として配られた。

雪がとけたら、この原石が露出している糸魚川・姫川にゆくツアーの計画があり、是非参加しようと思っています。

2005.2.9. 神戸 中西

参 考

弥生時代 大和の中心的な環濠集落 唐古・鍵弥生遺跡 walk

2000.2. 唐古・鍵弥生遺跡 Country walk スライド file より



「高師小僧」を愛知県豊橋 高師が原に訪ねて

もうひとつの古代製鉄原料?? 知っていますか??

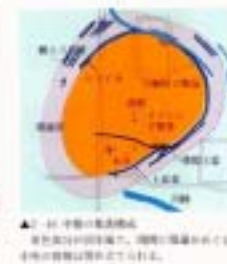
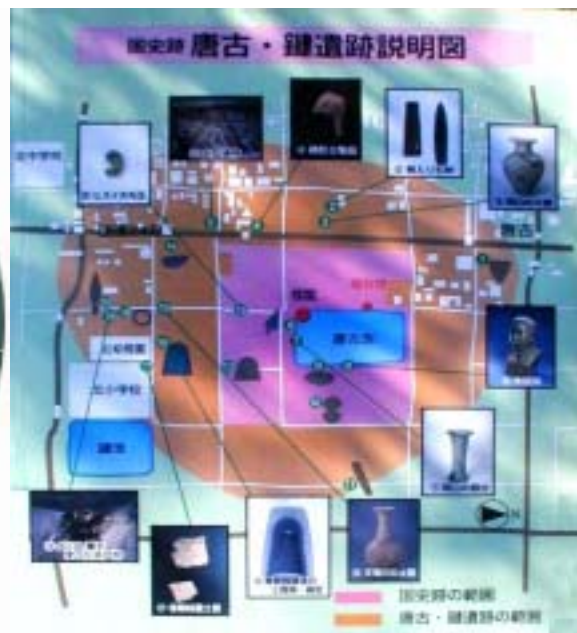
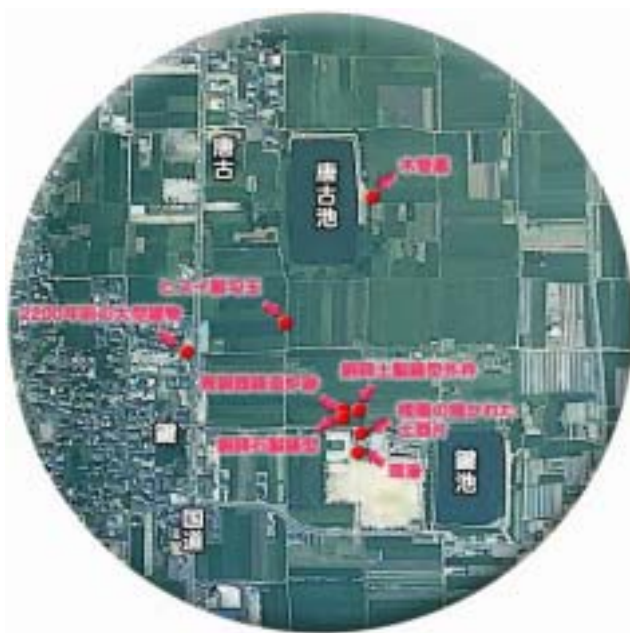
<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/12takashi.pdf>



【参考】

弥生時代 大和のの中心的な環濠集落 唐古・鍵弥生遺跡

2000.2.walk スライド file より
2005.3.1. krkkgi.htm by Mutsu Nakanishi



唐古・鍵遺跡は、今からおよそ2,000年前に栄えた、弥生時代の代表的な集落。

奈良盆地のほぼ中央、奈良県磯城郡田原本町大字唐古および大字鍵に位置し、遺跡面積の約42ヘクタールは近畿地方最大。直径約400mの範囲が居住区で、その周りには幾重にも「環濠」が巡っていました。

遺跡は弥生時代前期（約2,300年前）に成立し、古墳時代前期（1,700年前）までの約600年間続きました。

昭和11年の第1次調査では多量の土器・石器・木器が出土し、その成果は弥生時代研究の基礎となりました。

昭和52年の第3次調査以来継続的な調査が行われ、多数の絵画土器や青銅器鑄造施設の発見など重要な成果が相次ぎ、その重要性から、1999年1月27日、国の史跡に指定されました。

http://www.town.tawaramoto.nara.jp/8.karako_kagi/part/01.karako_kagi.html

田原本町 ホームページより

唐古池の縁に復元された楼閣

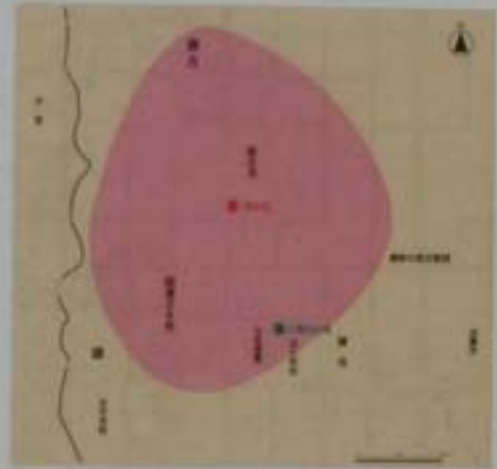
唐古・鍵遺跡の楼閣（復元）

平成3年秋、唐古・鍵遺跡の第47次調査において楼閣の描かれた土器片が出土し、古代建築史上、画期的な発見として、大きく取り上げられました。この土器は弥生時代中期（紀元1世紀）のもので、すでにこの時代に大陸文化を取り入れた建築物があったことを証明する資料となりました。1つの土器片には2層の屋根、大きな渦巻き状の棟飾り、3羽の鳥と考えられる波線が、また、もう1つには2本の柱と刻み梯子が描かれています。この建物の表現から、宗教的な建造物でないかと考えられています。また、魏志倭人伝（3世紀）には卑弥呼の宮室は「楼觀、城柵をおごそかに設け…」と記されています。卑弥呼の住む邪馬台国にはこのような高い建物がそびえていたのでしょうか。

この楼閣は高さ12.5m、柱の間隔4×5m、柱の太さ0.5mの規模です。屋根は茅葺きで藤篋製の棟飾り、窓はつきあげ窓、一枚板製の扉、刻み梯子などで復元しました。

平成6年4月1日

田原本町



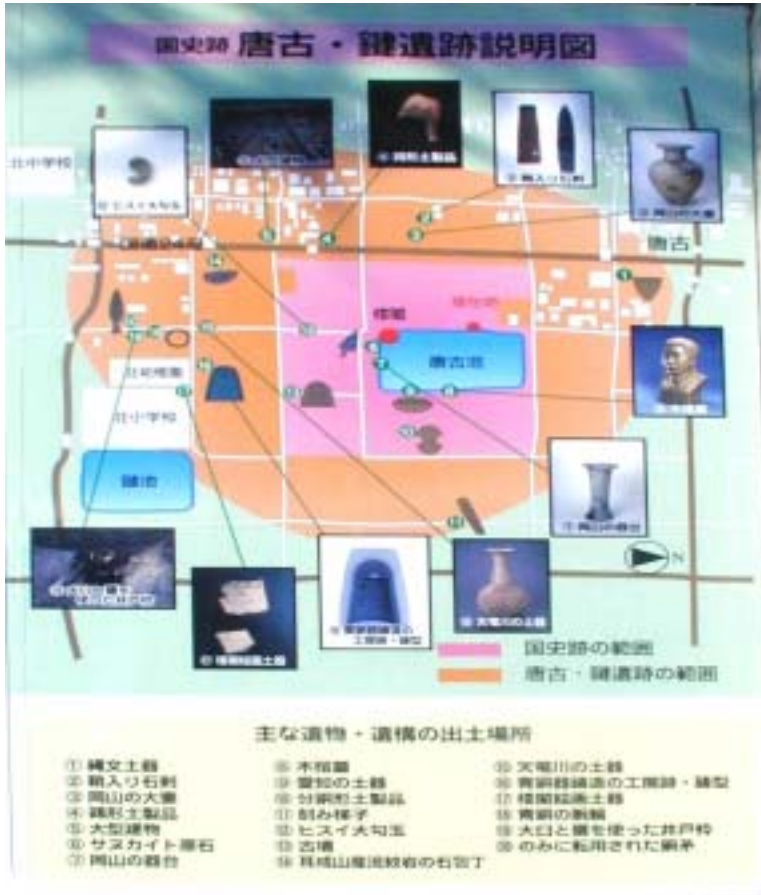
楼閣土器
唐古・鍵遺跡第47次調査
弥生時代中期 (A. 314出土)

中田氏の棟飾りが描かれたこの土器片は、高さ15cm程の板になります。上の縁片には二層以上の建物の下の縁片には内側に傾斜をもった柱と梯子が描かれています。二階建て以上の建物が弥生時代に存在したことを示す、日本建築史と画期的な発見となります。

この小さな土器片は、紀元1世紀頃に中国の影響を受けられていたことや、その存在を考慮するよう内容をもっています。



第 47 次調査で出土した絵画土器の「楼閣」をもとに、1994 年、唐古池の西南隅に楼閣が復元された。戦前の発掘調査で、弥生時代の遺構は完全に失われていますので、遺跡の保存上問題がないと判断された唐古池の西南隅に建てられた。復元楼閣の高さは 12.5m の 2 階建てで、4 本の柱は直径 50 cm のヒバ材を使用。平面 プランは 4 m × 5 m です。屋根は茅葺きで、丸太で放射状に押さえ、壁は外面が網代壁、内面が板壁となっている。唐古・鍵遺跡の建物に特徴的な渦巻き状の屋根飾りは藤蔓で作り、梯子は刻み梯子で復元。土器に描かれた屋根の上の逆 S 字状の 3 本の線は渡り鳥と解釈し、木製の鳥を東西両面にそれぞれ 3 羽ずつ設置している。



唐古・鍵遺跡から出土した遺物

唐古・鍵遺跡 第 9 3 次調査 (大型建物跡) の概要

2003年10月19日に行った現地説明会の資料より今回の調査は、遺跡内部の実態解明を目的とした内容確認調査で、調査地は、環濠内部の西地区にあたり、弥生時代中期中ごろの大型建物跡とともに、弥生時代中期から古墳時代初頭までの溝や井戸を検出しています。



集落の構造

唐古・鍵遺跡は、集落のまわりを大溝で囲む「環濠集落」です。居住区が一番内側を囲む大環濠の規模は、幅8～10m、深さ2mで、直径400mの範囲を囲みます。この大環濠の外側約100～150mには、環濠がドーナツ状に3～5条巡る「環濠帯」が形成されています。これらの環濠により、水害や外敵から集落を守っていたほか、普段は運河としての役目も果たしていたようです。

居住区には、高床建物や竪穴住居、井戸、木器を貯蔵する穴など多数のさまざまな遺構がみつかっています。

さまざまな生産活動

唐古・鍵の人々は、さまざまな道具を製作しています。石鏃や石剣などは二上山北麓で採れるサヌカイトを、稲穂を摘み取る石包丁は耳成山の流紋岩や紀ノ川流域の結晶片岩の原石をムラに運び込んで製作しました。

また、木器を水浸けした穴や環濠からは、製作途中の鋸や鋤などがよく出土します。これはケヤキやカシなどの木材を加工しやすくするため水浸けしたものです。

ムラの東南部では、青銅器の鑄造が行われました。銅鐸や銅戈、銅鏃の鑄型、送風管、とりべなど鑄造に使う道具類、炉跡などがみつかっています。

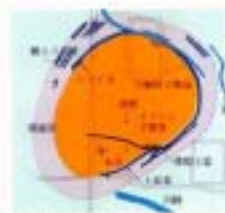
近畿地方の中核的な集落

唐古・鍵遺跡の周囲1km以内には、衛星集落や墓地が存在します。遺跡の北側600mには絵画土器が多量に出土した清水風遺跡、東側400mでは方形周溝墓がみつかった法貴寺遺跡、南側1kmには羽子田遺跡、西側600mには八尾九原遺跡などの小集落や墓地が存在し、唐古・鍵遺跡群を形成しています。

唐古・鍵遺跡は、大阪湾から船で大和川を溯ると最初に到達できる港であり、また、そこから山を越えると東方地域とも陸上交通でつながっていました。この遺跡からは、河内や伊勢湾沿岸地域、遠くは岡山県南部や天竜川流域の土器が出土しており、これらの地域との交流が盛んであったことが判っています。すなわち、物資流通の中心的な役割を果たしており、近畿地方の中核的な集落といえるでしょう。



▲ 1-11 北側の環濠遺構
環濠の中心部付近で、土器の埋蔵がみられる。



▲ 1-12 中核的な集落構造
環濠の中心部付近で、環濠の埋蔵がみられる。土器の埋蔵は環濠の外側で行われる。





主な遺物・遺構の出土場所

- | | | |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 縄文土器 ② 鞘入り石剣 ③ 岡山の大型 ④ 鶏形土製品 ⑤ 大型建物 ⑥ サヌカイト原石 ⑦ 岡山の器台 | <ul style="list-style-type: none"> ⑧ 木棺墓 ⑨ 愛知の土器 ⑩ 分銅形土製品 ⑪ 刻み梯子 ⑫ ヒスイ大勾玉 ⑬ 古墳 ⑭ 耳成山産流紋岩の石包丁 | <ul style="list-style-type: none"> ⑮ 天電川の土器 ⑯ 青銅器鑄造の工房跡・鑄型 ⑰ 樓閣絵画土器 ⑱ 青銅の腕輪 ⑲ 大臼と甕を使った井戸枠 ⑳ のみに転用された銅矛 |
|---|---|--|